

人生を応援するFD活動の構築を目指して

渡部 幹雄

今回の特集がFDであることを考えると、執筆するメンバーの中で教員経験が5年程度の筆者が一番執筆者に相応しくない存在であることを冒頭にお断りしたい。

そもそも今大学で求められている“学びのスタイル”と小中高の“学びのスタイル”との間に大きな差異があるのかという疑問がつきまとう。更には、これまで大学での学びに携わってきた大学教員の授業展開のあり方が今問われており、その改善策の一環として授業改善活動が求められているFD活動なのか、それとも従前の大学教員の授業には問題点はないが、一部の大学教員の資質が低下しており、そのためにFD活動を推進しなければならないという事態なのか、正直言って筆者にはその真相が見えていない。

さて本稿では、今何故FDが必要かという問いに対する解答や昨今のFD事情については経験豊かな他の特集執筆のメンバーの方々に明快に示していただけたらと思うので割愛することにする。

大学での教育活動はさておき、学校というものは、万国に共通して産業革命以降機械を効率的に動かすための人材が必要であったことと近代戦を戦うために集団行動や集団秩序を必要としたことに起因している。不揃いの製品は商品価値を失うことになり、工場としては不適格である。それで不揃いな思考を排除し、一つの目的のために一斉に同じことを脇目も振らずに成し遂げる人が必要となる。個性を否定された、人間の姿をした機械のような労働者を必要としたのである。近代の学校教育はまさしくフーコーの述べる「一望監視システム」¹の風景であり、工場で規格品を作り、学校では規格人間が製造されたとも言える。学校では黒板とチョークと教科書で一斉に型にはめた授業を効率良く機械的に教え込むことが求められる。校長は工場長であり、教科書の内容を伝える教師は生産ラインの生産管理者の役割に近い存在である。まさか大学がこのように不揃いな思考の排除を助長するためにFDに取り組むことはあるまい。大学は多様な価値を認めることにその大学としての存在価値があるのである。

随分と前置きが長くなったが教員経験が乏しい筆者としては自分が受けたFDの経験を述べることにする。

正直に言って筆者が受けた大学の講義は大半がつまらないものであったが、その中であって少数だが言葉に力があって心に響く講義をする教員が居た。その教員達は特別な教育スキルを持っている訳でもなく、板書の字が綺麗でもなかった。あるのは広い視野と深い知識と情熱、更には学生への愛情であった。講義の内容は学生達のレベルに合わせた分かり易いものでもなかったが、他の教員達に無い

その教員の資質に敬意を持った。結局、筆者はその少数の教員達の一人の下で大学から大学院まで指導を受けることになったのである。当時の恩師の年齢は40代前半であったが、40年後、現在恩師は80歳を超えている。その恩師から電子メールが普及した1990年代前半頃から二十数年間、ほぼ三日置きにメールが届いている。また母校を去ってから編者としての恩師の下で分担した書籍は数冊あり、何度か国内外の調査旅行に同行したり、転々とする筆者の職場を訪問して頂いたり等々の関係は現在も続いている。正しく生涯の師である。こうした師との関係を構築できたことは筆者の財産である。

師は決して押し付けがましい指導はしないで、私の乏しい力を引き出してくださった。研究テーマに関しても筆者の関心に沿った指導の姿勢を貫いてくださった。そうした自分なりに自分で考える力を育むという指導で筆者の課題解決能力を高めて戴いた。師は規格外品の筆者を一人の人間として認めて応援してくださったのである。師との出会いは師の講義を初めて聴いた時から始まった。以来40年以上の長きに渡り、師弟の関係が継続している。

さて、教員としての立場になった今、どれだけ学生の心に響く授業ができているかを自問自答している日々である。一回一回が真剣勝負だった師の授業をFD活動の良き見本として奮闘してはいるが、師の領域にとても及ばない授業を繰り返している現状でもある。

とは言え、個別の授業での自分自身の成果目標としては、授業毎に学生に渡しているA4サイズの感想ノートの紙面の8割以上記述で埋められているような授業を合格としている。

蛇足だが、かつての黒板とチョークと教科書のセットがプロジェクター、PC端末と各種ハイテク機器に変わったとしても私がイメージするFD活動とは似て非なるものである。先月、教員経験の長いベテラン教授から「学生がわかろうとわかるまいと自分のペースで講義をしたい。学生がわかりたければ勉強してついてきて、学生の質問攻めにあいたい」とお聞きした。新米教員の私にはFD活動が確とは分からないが、大学の“学び”の多様性を考えれば解答は見えるのではと考えている。

注

1 小笠原喜康『博物館の学びをつくりだす』ぎょうせい、2009年 p174

参考文献

岩田弘三『「大学の学校化」と大学生の「生徒化」』武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis Vol.5 2015年